

隅田川

へこれは隅田川の渡守にて候 今日舟を急ぎ 人々を渡さばやと
存じ候 又都より女物狂いの下り候由 暫く舟を止め 彼の物狂い
を待とうずるにて候

へ実にや人の親の 心は闇にあらねども 子を思う道に迷うとは
へ今こそ思いしら雪の 身に降りかゝる憂き苦勞 誰に語りて晴
らすらん

へこれは都北白川に 年経て住める女なり

へ思わざりき思い子を ひと商人に誘われて へ行方は何処逢坂
の関の東の国遠き 東とかやに下りぬと へ聞くより心乱れ髪
櫛けずらん青柳の 愛しわが子を尋ねわび 千里を行くも親心
来るとはなしに東なる 隅田河原の片ほとり渡りに近く着きに
けり

へのうく舟人わらわをもその船に乗せて給わり候え

へおことは何処より いづかたへ下る人ぞ

へこれは都より人を尋ねて この東へ下る者にて候 のう舟人

あれに白き鳥の見えたるは何と申し候ぞ

へオ、あれこそ沖の鷗なり

へうたてやな浦にては 千鳥ともいえかもめとは などこの隅田
川にては 都鳥とは告げずして へ沖の鷗と夕潮に へ在吾の君
の古えは わが身の上に業平や へいざ言問わん都鳥 へ我思い
子はありやなしやと 問えどへ答えも渚こぐ へ舟人妾を乗せ給
えと いうに へ舟人掉取り直し

へ急ぎて舟に乗り候へ

へオ、嬉しの舟人やな、 オオあの向いの柳のもとに 人の多く集
まりしは 何事にて候ぞ

へさん候 あれは大念仏にて候 それにつき哀れなる物語りの候 こ
の舟の向いへ着き候はん程に 語つて聞かせ申すべし、さても

へ去年の弥生に 人商人の都より 幼き者を買いとりて 奥へ下らん道すがら へならわぬ旅の疲れにや へ一足だにも歩めじと この川岸にひれ伏せしを 情を知らぬ人買いは 幼き者を路次に捨て そのまゝ奥へ下りたり

へその幼な子を見てあるに 由ある者と思うにぞ

へ人々さまざまいたわりて 国を問えば へ都の白川 へ父御の名をば問いたるに へ吉田と許り夕告ぐる へ諸行無常の鐘の音を へ聞くが此世の名残りにて 草葉の露と消えにしは へ哀れというも愚なり 今日乗合いの方々も 逆縁ながら一遍の 念仏申させ給えかし

へのう舟人 今の物語りはいつの事にて候ぞ

へ昨年三月、しかも今日の事にて候

へシテその稚子の歳は

へ十二歳とか

へその名は

へ梅若丸

へその幼き者こそは この物狂いが子にてあれ これは夢かや浅ましやと 人目も恥ず泣き伏せば

へオ、さては御身が子にてありしか あら悼わしや せめては亡き人の墓なりとも見せ申さん いぎ此方へ

へいぎさせ給えと伴えば へ昨日迄も今日迄も 逢うを頼みに見も知らぬ 東の果へ下りしに へ今は此世になき跡に へ一ト本柳枝たれて 千草百草茂るのみ せめては土を掘返えし亡骸なりとも今一度 見たや逢いたやと許りに 落つる涙は道芝の 露を欺くばかりなり

へ如何に御歎き候共 今はその甲斐候わね 只々後世を吊い候えや

へ我子の為と身を起し へ月の夜念仏諸共に へ南無阿弥陀仏 へ阿弥陀仏 隅田河原の波風も へ声たて添えて へ南無阿弥陀

仏 へ阿弥陀仏

へのう／＼今の念仏の内に 正しく我子の声すなり

へ我子はどこにいつくにぞ あるかなきかと箒木のいとゞ心の
物狂い 我子の声と聞きたるは へ川に飛び交う 都鳥 へ我子の
姿と見えたるは へ塚に添うたるさし柳

へすいと埒を立つ白鷺の 残す雫か露か涙か へ幻の見えつ隠れ
つする程に へ空ほの／＼と明けにけり。